

第三節 弥生時代

稲作農業の伝播

縄文時代に続く弥生時代は、米作りを主にした農業社会であった。この社会は、縄文時代にはなかつた階級が生まれ、国家の成立の基礎をつくった時代でもあった。この弥生時代は、

紀元前三世紀末ごろから紀元後三世紀ごろまで続き、主に土器の変化から前・中・後期の三つの時期に分けられることが普通である。この時代の文化は、縄文文化を基礎に、多くの大陸系文化の影響を受けて成立発展した。中国においては、すでに前漢の武帝が領土を拡大し、朝鮮半島に勢力を伸張させており、その漢文化は、日本へも強い影響をもたらしたのである。なかでも稲作農業の伝播と金属器の伝来は、弥生文化を特徴づける大きな要素となった。

稲作農業は、中国揚子江下流あたりから朝鮮半島南西部を経由して北九州に移入したとみられる。この稲作を行うのに適した低湿地は、すでに述べたように縄文時代の終りごろには沿岸部ぞいにできあがっていたらしい。九州や瀬戸内、日本海の沿岸の弥生時代前期の遺跡の多くは、低地に位置し、下層には縄文晩期の土器、石器類の伴うものが多い。佐賀県菜畑遺跡、福岡県板付遺跡などでは、縄文晩期の層から炭化米や水田址が発見されており、佐賀県宇木汲田貝塚や長崎県山ノ寺遺跡、広島県帝釈名越岩陰遺跡などでは、縄文晩期の土器の底部に糊の圧痕がついたものがみつまっている。このことからすると、縄文晩期の人々の生活のなかに、すでに稲作が受け入れられていた地域もあるといえそうである。菜畑遺跡、板付遺跡などでは水路や矢板で区画された水田址と

ともに、諸手鋸もろたぐわ、まぐわ、えぶり、石庖丁、石鎌、堅杵たてぎねなどが出土しているし、日本海沿岸の松江市の西川津遺跡にしがふづからは、弥生前期の木製鋤、鍬などが出土している。鋤や鍬は、土を掘ったり、耕したり、土をすくための道具であり、えぶりやまぐわは、水田の代かき用として、石庖丁、石鎌などは稲穂摘み具として使われた。また、堅杵は、杵の脱穀用として重要な道具であった。このように整備された水田址や機能的に分化した農具の発見は、九州や本州西端地域での稲作が、大陸からの伝来当初からある程度完成された形をもっていたことをしめしている。しかし、一般に初期の稲作は、小規模でしかも未熟なものであったとみられ、収穫量も多くはのぞめなかった。このため、住居の近くの微高地では、ウリ、アワ、ムギ、ヒエなどの副次的な畑作物を栽培したり、狩猟、漁撈といった前代からの採集にも大いに依存していたにちがいない。広島市の中山貝塚では、弥生前期から中期の貝層から、弥生土器、石斧、石庖丁のほか大量の貝殻、石鎌、骨針などが出土している。人々の生活が稲作を中心としながらも、狩りや漁撈、木の実の採集も重要な仕事であったことをあらわしている。

しかし、稲作の開始は、自然の動・植物の採集によって維持していた縄文時代の生活と違って人々の生活を定着的なものとした。人々は、一定の場所に住居を構え、稲作農業の暦に従って生活することをはじめた。これは当然のことながら人口の増加をもたらしてきたのである。

弥生人とコメ

本州西端の山口県土井ヶ浜遺跡では弥生前期の多数の人骨が発見されている金岡丈夫・坪井清足・金岡生茂一九六一年。葬られた弥生人は、縄文人や古墳時代人にくらべると長身、長頭であったこと

が報告されている。これは、弥生時代のはじめ、在来の短身、短頭の縄文人より背が高く、長頭の人々が大陸から渡来し、縄文人との混血によって新たな弥生人が誕生したからであろうとされている。しかし、この渡来者たちの数が比較的少なかったか、あるいは後続する渡来者がなかったために、長身、長頭という形質は、しだい

に在来の人々のなかに吸収され、その特質を失い、つぎの古墳時代には、再び短身、短頭の形質に戻ってしまったのであろうといわれている。金岡丈夫「弥生時代人」『日。本の考古学』Ⅲ、一九六六年。この弥生前期の長身化は、本州西端を含む、北九州地方に限られており、他の地域においては、縄文人の系譜をひいた人々が、新しい稲作文化の伝播とともに弥生人へ衣がえしていったようである。この弥生時代人は、コメを主食とした。コメは、今のコメと同様に「日本型」に属するものである。栽培稲は、狭長粒の「印度型」と短粒の「日本型」とその「中間型」に区別されているが、日本で見られた古代米は、すべて日本型である。このことから日本にちかい大陸のどこかに栽培の根拠をもったものが移入してきたものとみる証明にもなっている。稲の渡来の経路については、朝鮮、中国の古代米の例からみて、中国揚子江下流付近から朝鮮半島南西部を経由して、背の高い渡来人とともに伝播したとする見方が有力である。こうして北九州地方で始まった農耕生活も、時代の進展とともに増加した人口の生活を維持していくことは、しだいに困難になっていったとおもわれる。このため、弥生時代の中ごろ以降になると、人々は積極的に水田の開墾をはじめようになった。地下水位が低くて耕作に適さなかった土地に土木工事をして水を引き、水路や畦あぜには矢板や杭をうちこんで整備していった。そして低湿地に限らず内陸部や山間部にまで水田をひろげていったのである。広島県の三次盆地や世羅台地、西条盆地の遺跡をはじめ、熊野町の白石遺跡、大水南地遺跡、狐城遺跡などで、弥生中期以降の土器、石器がみつかったことは、広島県の内陸奥部に稲作がひろまっていたのが弥生中期以降のことであることを裏付けている。さらに弥生後期になると、東日本においても大規模な水田が出現してくる。静岡県登呂遺跡とろでは、矢板をうちこんで保護した幅の広い畦と水路によって整然と区画された水田址が発見されている(図2-3-1)。また、群馬県日高遺跡ひたかでも約四〇面の水田址がみついている。稲作技術が大いに進歩したことをうかがわせている。登呂遺跡の水田の場合、水田は八四〇〜二四〇〇平方メートル



図2—3—1 登呂遺跡の水田址
 (『日本考古学の視点』
 (上), 1974年より)

前後の大きさがあり、水口みなぐち(取水口)とあと口(排水口)が設けられ、稲の生育に応じて水を調節する方法もとられていたらしい。また、えぶり、大足おおあし、田下駄たげたなどの発見は、水田面の高低をならし、水と泥とを攪拌かくはんして水もちをよくするための代かきや田植なども行われていたことをしめしている。

海の幸と山の幸

人々がコメを主食とする生活をはじめたとはい

え、海の幸や山の幸を食べなくなったわけではない。このことは、現代のわれわれの生活を考えても明白である。海の幸は、鮎もり、ヤス、釣針、網、手網たもなどを使って魚をとただけでなく、カキ、ハマグリ、アワビ、タニシ、シジミなどの貝類も好んで食べていた。広島市の中山貝塚や西山遺跡などで大量の貝殻が発見されていることからあきらかである。また、タコ壺を使ってタコをとっていたことも、多くのタコ壺の出土が証明することである。山の幸では、イノシシ、シカなどの獣は、蛋白源として重要な食料となったことは無論のこと、皮、角、骨は、衣服や生産生活用具として大切な材料となった。遺跡から出土する動物骨をみると、縄文時代にくらべてシカの骨は少なくなり、イノシシの骨が多くなっている。シカは、土器や銅鐸どうたたくの絵によく描かれていたり、占いの卜骨ぼつこつとして使用されることが多い。シカを神につかえる動物としてみる信仰があったとみられ、このためシカよりイノシシを多く捕獲して食料にしたとおもわれる。山の幸では、このほか、クリ、シイ、トチなどの

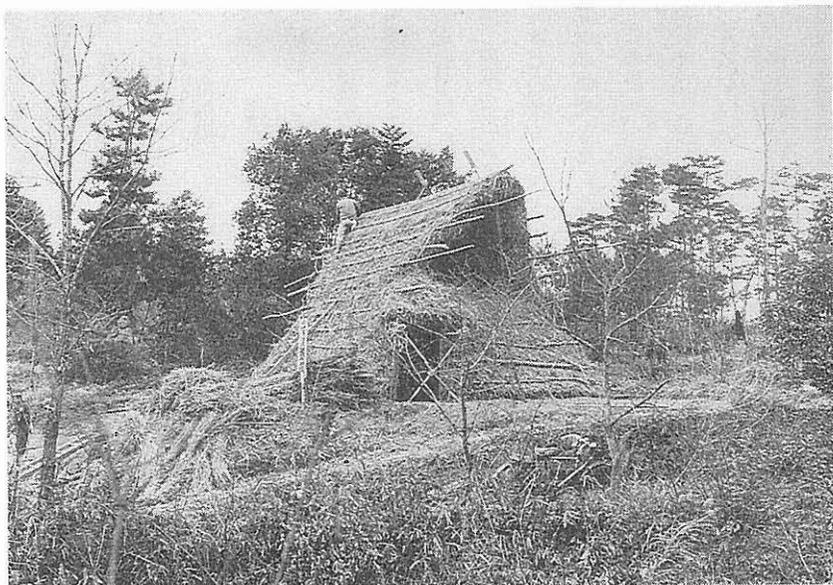


図2-3-2 復元中の竪穴住居（三次市日光寺住居址）

木の実やヤマイモ、ユリ根、ヤマブドウなども食べていたと推測される。球根類は遺存しにくいいため、痕跡はみつからないが、北九州地方の弥生遺跡では、木の実類を貯蔵した貯蔵穴が多くみつかっているし、広島県内でも住居に付設された貯蔵用竪穴がみつかる例が多い。

住居と集落

住居は、縄文時代と同様、竪穴住居が一般的であった。住居の平面形には、円形、方形、隅の丸い方形などがあるが、後期には方形のものが多くなる。床の周囲の壁ぞいには、浅くて幅の狭い溝のめぐるものが多い。住居は、床に四本の主柱をたてるのが普通で、それに何本かの副柱を配したものとや壁の内側にそって等間隔に柱を配したものなどがある（図2-3-2）。一般に床の中央かもししくは一方へ寄ったところに炉が設けられている。また、住居の内側や隣接した外側に貯蔵用の竪穴をもつものもある。住居の面積は、二〇〇〜三〇〇平方メートルのものが多く、広島市安佐

北区の城前遺跡の住居址のように一〇〇平方メートルにちかひ大型のものも存在する。集会所とか共同作業小屋の性格をもつのかもれない。これらの住居は、数軒ないし一〇数軒が集まって集落を構成し、新しい水田の開墾や祭りのときには、この集落を一つの単位として共同して行っていたとおもわれる。集落は、小高い丘の上に営まれたものが多く、広島周辺の安佐北区恵下山遺跡では、丘陵尾根上から五軒の住居址と土塋が検出されており、真亀遺跡でも丘陵上の六か所から各々二〜三軒の住居址と土塋墓が発見されている。広島県教育委員会『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』一また、安佐南区長う子遺跡では、二軒と四軒からなる住居址がみつかり、大谷遺跡でも、二軒と四軒を一つのグループとする住居址がみつかり、広島市教育委員会『広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告』一九八四年このように太田川下流域における弥生後期の集落は、水田としての可耕地が限られていたためか二〜四軒の住居を一つのまとまりとする小さな集落（農業共同体）が各地に点在していたものと考えられる。ところが、最近調査された広島市安佐南区の毘沙門

台遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初めごろの住居址一〇〇軒以上と二〇〇基ちかくの土塋（貯蔵穴ないし墓）がみつかりしている。これらは必ずしも全てが同時期に存在したものではないが、いままで知られていなかったほどの多くの住居があったことは確実である。このような大規模な集落と前述した小規模な集落との関係は、今後の研究をまたねばならないが、母村と分村といった関係が存在したのかもれない（図2-3-3）。

このほか、後期になると広島湾岸でも、標高二〇〇メートルを超える高いところにも集落が出現してくる。高地性集落と呼ばれる遺跡で、眺望のきく山頂や山腹に位置することが多い。集落の在り方は、低地のものと同様に変わらないが、通常の農耕生活は無論のこと日常生活を営むこともきわめて不便な場所にある。これらの遺跡は、国家統一の過程の争乱時における軍事的性格をもった要塞と考えられている。典型的な遺跡としては、広島市西山遺跡や廿日市町高尾山遺跡などがある。西山遺跡は、広島湾頭をのぞむ標高二六一メートルの山頂近くに

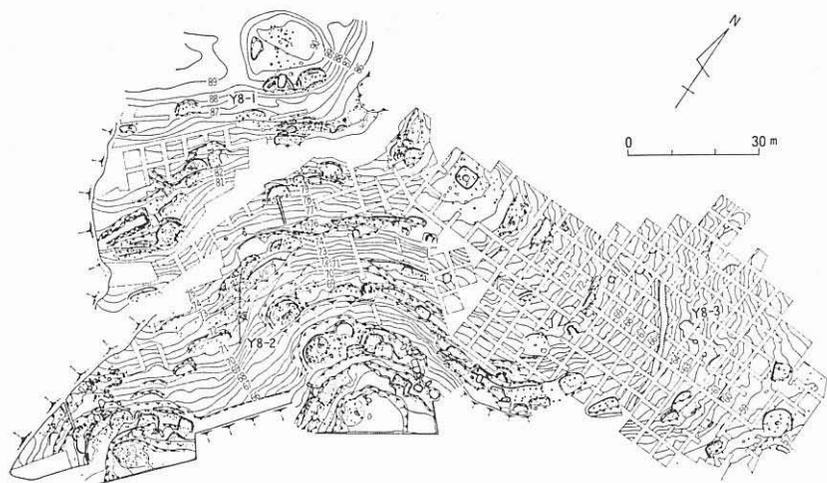


図2-3-3 丘陵斜面につくられた住居群（岡山県用木山遺跡『えとのす』24、1984年より）

あり、住居址と貝塚からなる。鉄鏃、銅鏃、骨鏃などの武器類の出土が目立っている。高尾山遺跡は、極楽寺山（標高六九三メートル）の南側山腹の標高約二六七メートル付近に位置し、住居址とともに多数の土器がみつかった。いずれも広島湾を一望できる場所であり、内海交通の要衝を主張する性格をもった遺跡といえるであろう。

熊野町内では、弥生中期の壺、甕の出土した大水南地遺跡、弥生中期の土器、石鏃、石錐いしきりなどのみつかった白石遺跡、弥生後期土器の包含層のみとめられる狐城遺跡などでは、集落の存在が想定されるが、遺跡の立地状態からみて、谷筋の湿地を利用した小規模な農業を営んでいたものと考えられる。

弥生土器

縄文土器が、煮炊にたき用の鉢形土器を基本としていたのに対し、弥生土器は、はじめから用途によって器形が分れていた。日常の土器には、貯蔵用、煮炊用、食卓用、水の運搬用があり、儀式に使用する土器には、祭祀用、埋葬用とがあった。貯蔵用としては、主に壺が使われた。壺は、縄文時代の終りごろには出現してい

るが、弥生時代になると壺の果たす役割は高くなり、甕との比率が半々に達するほどになってきた。稲作の開始によって食生活が一新した結果であり、種籾の保存、食料の貯蔵などに使われることが多くなったことを示している。煮炊用には甕が主に使われた。甕は煮炊きに便利のように口が広くつくられており、胴部から底にかけて煤が付着していたり、赤く焼けたりしたものが多い。食物の盛りつけには、鉢や高坏が使われ、水の運搬には、壺が使われた。祭りに使う土器は、弥生中期以降になってあらわれてくる。高坏や壺などをのせる器台や底や胴部に孔のあけられた壺や高坏、小型のミニチュア土器などがある。これらの土器は、各種の文様で飾られたり、赤く丹彩されたものがあり、農耕社会の成立、進展とともに農業に関係した祭りがさかんになってきたことをしめすものであろう。埋葬用の土器では、九州では大型の甕が甕棺専用としてつくられたが、他の地域でも大型の壺が壺棺用として製作されている。これらの弥生土器の製作は、素地作りからはじまり、成形、調整、施文、焼成の順序で行われた。採取した粘土は、水を加えてよく練^ねって素地をつくるが、乾燥、焼成時のひび割れを防止したり、焼きあがりをよくするため砂粒を混入することが多い。成形には、棒状の粘土紐を用いた粘土帯の積みあげ法によったとみられ、ロクロはまだ使用していない。形のできあがった土器は、つぎには表面を平らにしたり、薄くして、器面の気孔をふさぐための調整が加えられる。指先や布、ヘラなどでナデたり、削ったり、磨いたりして器を整えている。その後、表面には、ヘラや櫛齒状の用具を使って文様をつけ、最後に平地か凹地を利用して六〇〇〜八〇〇度の温度で焼きあげたとおもわれる。こうして製作された土器も、地域や時代によって調整や文様のつけ方などには違いがあったことが知られている（図2-3-4）。

瀬戸内地域の弥生前期から中期の土器の標式となっている中山貝塚では、前期前半の土器（中山Ⅰ式）は、壺形土器は肩部や胴部にヘラによる木葉文^{このはもん}や重弧文^{じゅうこうもん}がめぐらされ、甕形土器では、口縁部の下に二〜三本のヘラ描き

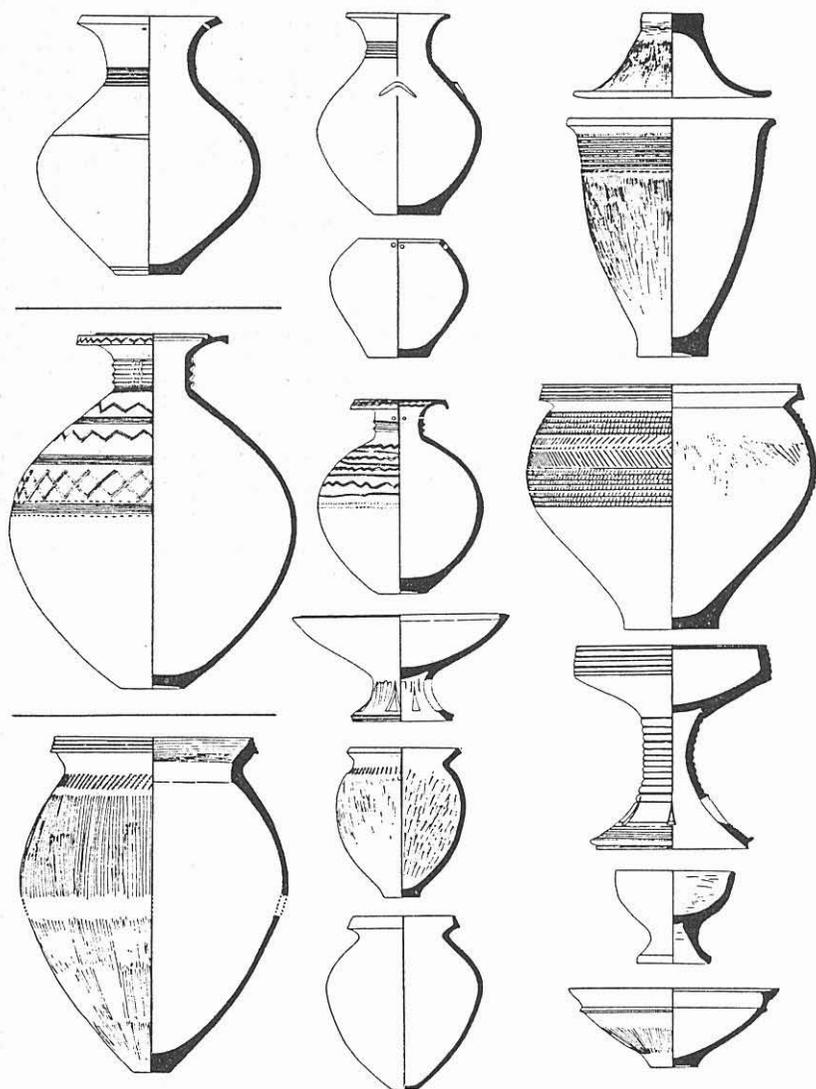


図2-3-4 弥生土器の移りかわり（広島県内出土）

沈線文のめぐるものを主体としている。前期後半の中山Ⅱ式土器では、壺形土器は、頸部や胴部に沈線文や烈点文、凸帯文がめぐり、甕形土器では、口縁部の下のヘラ描き沈線の本数が多くなり、一〇本ちかいものもあらわれる。表面は、刷毛によりよく調整されている。中期前半の中山Ⅲ式土器になると、壺、甕とも施文用具は、ヘラでなく櫛に変化し、中期中ごろの中山Ⅳ式土器では、櫛目による文様が発達する。壺形土器では、頸部、胴部に櫛による沈線文や波状文などがめぐらされるが、甕形土器では、文様はしだいになくなる傾向がみられる。このほか、丁寧なヘラ磨きのほどこされた高坏も出現している。

広島周辺では、つぎの弥生中期後半の標式となるような土器は、まだ明らかでないが、断片的な出土資料によれば、文様としては、凹線文が出現し、口縁部の上端に一〇数本の凹線がめぐるものが多い。表面調整では、ヨコナデ、ヘラ削りのものが増えてくる。つぎの弥生後期の土器では、広島市上深川遺跡出土の土器が標式となっている。この時期のはじめは、口縁部を中心に凹線文が盛行し、壺の胴部上半は、櫛描き沈線文、刺突文によって飾られることが多いが、後半には、凹線文、櫛描き沈線文ともにみられなくなり、装飾性に乏しくなる。壺形土器では、底部が丸底へ変りはじめ。表面調整をみると、内面のヘラ削り調整が全面にほどこされるようになってくる。一般に土器のつくりは粗雑になり、日用品としての性格が目立ってくる。後期の遺跡からは、多量の土器が出土することが多く、一度に多くの土器が製作されたようである。なお、弥生時代には、海水を煮たり、焼いたりして塩をつくる製塩も行われており、瀬戸内沿岸地方でも製塩に使った土器が分布している。専門的な塩づくりが行われていたことをあらわしている。

磨製石器群と鉄製工具

稲作の開始とともに大陸系磨製石器群と鉄製工具類の出現は、弥生時代を特色づける大きな要素であった。石製工具には、太型蛤刃石斧、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、

でも鉄器が製作されるようになったことをあらわすものであろう。わが国が、中期以降になると工具のほか農具(図2-3-6)や武器、祭祀用具にも出現し、数も増加してくる。わが国

でも鉄器が製作されるようになったことをあらわすものであろう。わが国が、中期以降になると工具のほか農具(図2-3-6)や武器、祭祀用具にも出現し、数も増加してくる。わが国

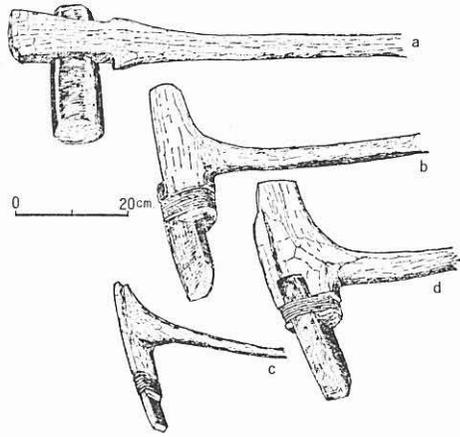


図2-3-5 磨製石斧類の着柄例(『古代史発掘』4、1975年より)

のみ型石斧、石錐などがあった。大型蛤刃石斧は、大形で重量のある磨製石斧で、原材の伐り出しや荒割りに使われた(図2-3-5)。柄は棒状で、先端がやや太く瘤状につくられ、石斧をとりつけるための楕円形の穴が穿たれており、刃と柄が平行して取りつけられていたとおもわれる。柱状片刃石斧、扁平片刃石斧などは、刃が柄と直角につけられており、木材を削ったり、面を整える手斧ちようなとしての機能をもっていたようだ。これらの磨製石斧類は、弥生中期後半以降になると、板状の鉄斧にとつてかわられるようになるといわれている。川越哲志「弥生時代鉄製工具の研究」―板状鉄斧について―『広島大学文学部紀要』第三三卷、一九七二年 また、後期には、他の石器類も「だいに

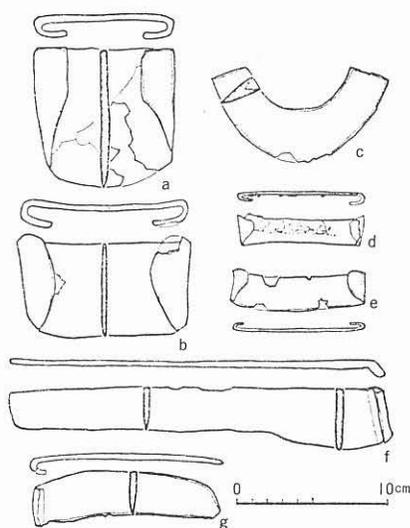


図2-3-6 鉄製農具類(『古代史発掘』4、1975年より)

青銅器と祭り

青銅器もまた、弥生時代を特徴づける遺物である。青銅器には、鏡、銅剣、銅戈、銅矛、銅鐔などがある。北九州地方に多く分布する細形の銅剣、銅矛などは、はじめは、墳墓に副葬するための儀器として大陸から輸入されたものであった。しかし、弥生中期後半以降になると瀬戸内地方から近畿地方にかけて、細形の利器を祖形として新しい国産(仿製)の中細形、中広形のもものが生れてくる。さらに、仿製が進むと形は、

しだいに大形化、長大化が進み、鋒なども幅広となって鋭利さは失われ、錫の含有量も少なくなってくる。長さが八〇センチをこす長大な銅矛もあらわれてくる。このような青銅器は、もはや利器としての機能を失くし、利器の形をした祭器(武器形祭器)に変わっていったとおもわれる。これとともに、当初は、特定個人の所有物として墳墓に副葬されることが多かったものが、国産化が進み、大形化してくるとともに、墳墓でなく集落とは離れた場所に一括して埋納されることが多くなる。青銅器が個人の所有から共同体(ムラ)の所有へと移り、祭器として製作され、使用されるようになったことをしめしている。広島市安佐北区の諸延八幡神社の境内からは江戸時代に七本の平形銅剣が出土したといわれている。藤井貞幹『好古日録』寛政九年。また、広島市安芸区の絵下谷遺跡や尾道市大峰山遺跡などからも中細形銅剣が出土している。平形銅剣は、もっとも新しい型式の銅剣であるが、瀬戸内海沿岸を中心に分布するものであり、内海交通の安全を祈る祭器であったと考えられている。

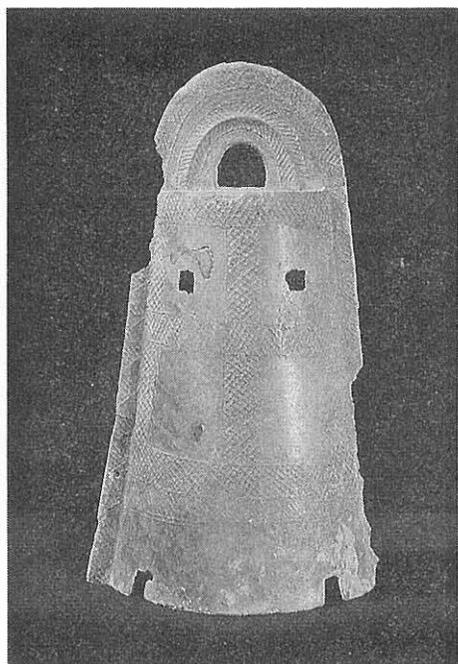


図2-3-7 世羅西町黒川出土の銅鐸

青銅祭器として最も代表的な国産青銅器は銅鐸である。銅鐸をはじめは、高さ二〇センチ前後の大きさで、内側に舌をつり下げて、振り鳴らして音を聞く祭器であったが、しだいに大形化、裝飾化し、一三〇センチをこえる高さの大形の銅鐸もあらわれてくる。聞く銅鐸から見る銅鐸へ変化していったことがわかる。広島市木の宗山遺跡では、山腹の大岩の下から銅鐸、銅剣、銅戈が一括して発見された〔谷井済一「安芸高宮郡福田発見の銅鐸・銅剣」『考古学雑誌』第三卷第一〇〇号、一九一三年〕。銅鐸は、高さ一八・九センチの小型の外縁付紐式〔が、えつぎふし〕で古式の型式のものである。文様から横帯文銅鐸もしくは邪視文鐸と呼ばれている。また、世羅郡世羅西町の黒川からも大きな石の下から、高さ二一・三センチの扁平紐式銅鐸がみつかつている〔図2-3-7〕〔松崎寿和・潮見浩・藤田等「広島県（備後国）世羅西出土の銅鐸」『広島大学文学部紀要』第二六卷一號、一九六六年〕。これらの銅鐸もまた、日常生活の場からは離れた丘陵上や山腹の巨石の下といった場所に埋められている場合が多い。集団の共有の祭器として農業に関係した祭祀に使われたものとおもわれる。そして、これらの祭器は、祭りの時だけとり出して使い、祭りが終ると再び地中に埋納保管したものとみられている。

このほかの青銅製祭器には、巴型銅器〔よむかたがたうき〕や青銅斧などがある。広島市の西山遺跡出土の巴型銅器は、円錐状の台座とその下底部に水平につけられた鉤状〔かぎ〕の脚からなり、座の内側には、釧〔ちまき〕がつけられている。紐を通して身体や器物に装着して一種の魔除け

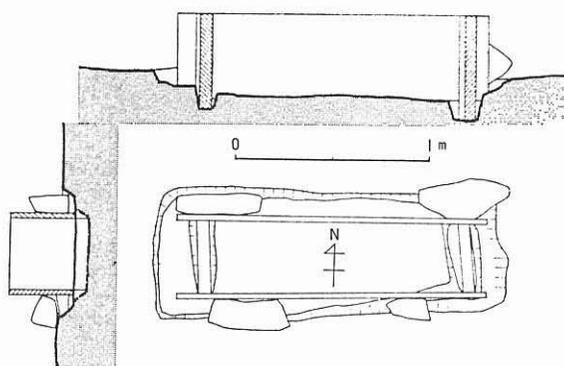


図2-3-8 木棺墓の復元想定図（三次市高平遺跡『広島県文化財調査報告』第9集、1971年より）

として使われたものであろう。東広島市西条町の大横三号遺跡では、竪穴式住居址の中から青銅斧が出土している。青銅斧は、武器形祭器の矛か戈の折れた先端部を研磨してつくったもので、長さ五・一センチ、幅三・四センチ、厚さ〇・六センチの大きさがある。実用性に乏しく、農業儀礼に関係した祭りに使われたものであるろう。

広島県埋蔵文化財調査セ。
ンター所蔵資料による。

これらの青銅製祭器のほかにも、この時代の祭祀品としては、分銅形土製品や大型丁字頭土製勾玉、丹塗りの特殊器台、特殊壺、穿孔のある土器などがある。分銅形土製品や勾玉は、家の軒先や人の身体につり下げられ、魔除けとされたものであろうし、特殊器台や特殊壺などは、共同体の支配者の埋葬と関連して、共同体の祭りに使われたものであるろう。

墓と副葬品

弥生時代の墓制には、北九州地方に分布する甕に遺体を埋納する甕棺墓や支石墓のほか、土壇墓、木棺墓、箱式石棺墓、壺棺墓、方形台状墓、方形周溝墓など多くの葬法があったが、基本となるのは、縄文時代から継承された土壇墓であった。弥生時代前期の土壇墓、木棺墓は、三次市高平A号墓や山県郡千代田町塚迫遺跡でみつかっている。高平A号墓では、丘陵尾根上の積石の下から三基の木棺墓、土壇墓がみつかった（図2-3-8）、小規模な家族墓の性格をもった墳墓と考えられる（図2

県教育委員会『広島県文化財調査報告』第九集、一九七一年。

塚迫遺跡では、丘陵上から八基の土壇墓、

広島

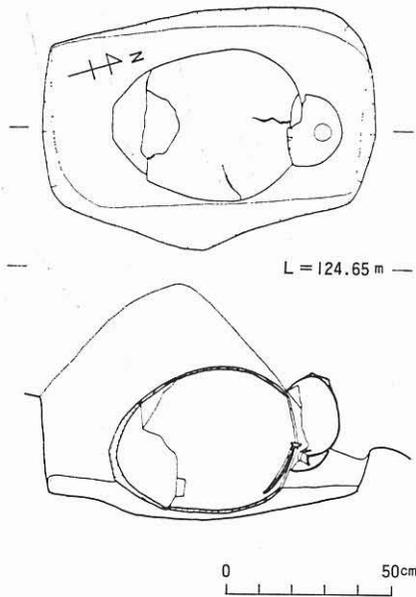


図2-3-9 壺棺墓（広島市長う子遺跡）

木棺墓と六基の土器棺墓が発見されている。土墳墓は、長さ六〇〜一九〇センチの長方形、楕円形の形をなし、上面に墓標にしたとおもわれる石の置かれたものや木棺の押えにしたとおもわれる詰め石のみられるものなどがあり、小型の土器の副葬されたものも存在した（広島県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(3)一九八二年）。また、弥生前期から中期の遺跡と推定される三次市松ヶ迫遺跡の土墳墓、木棺墓（二基）は、墳は、一〇〇〜一九〇センチ前後の大きさがあり、墳内には、木棺の押えにしたとおもわれる石群の存在するものが多い（広島県教育委員会『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告』一九八一年）。つぎの弥生中期の土墳墓、木棺墓も形や規模は、前期のものとは大差はないが、三次市四拾貫小原遺跡、陣床山遺跡、東広島市藤ヶ迫遺跡などで検出されたものは、規模が一四〇〜二八〇センチであり、前期のものにくらべて大形化する特徴がある。なかには、二段に掘りこまれた土墳墓も出現し、墓標石の存在するものも多い。また、特異な例として広島市牛田早稲田山遺跡でみつかった円筒形土墳墓もある。

後期になると、土墳墓は、二段掘りこみのものが多くなり、埋葬の数も増加する傾向がみられる。三次市花園遺跡では、石積みで方形に区画された内側に三〇〇基ちかい土墳墓、木棺墓、石蓋土墳墓が築かれており、広島市西願寺遺跡A地点でも四二基の土墳墓、木棺墓が検出されている。人口の増加とともに集落から少し離れた小高い場所が、集落（ムラ）の墓地として選ばれていたことがわかる。

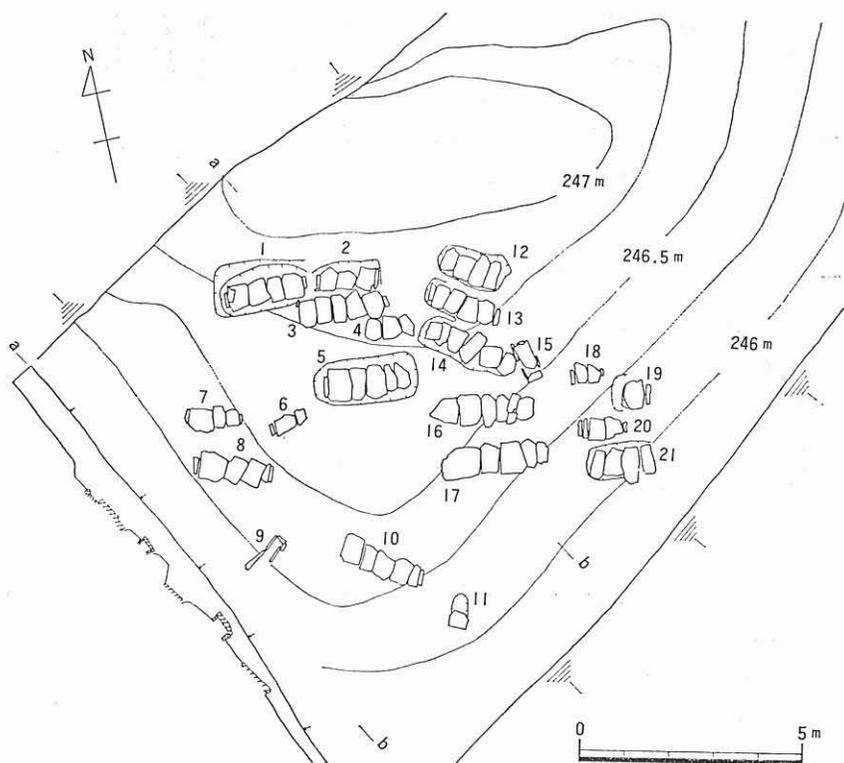


図2-3-10 鍵向山墳墓群配置図(『賀茂カントリークラブゴルフ場内遺跡群調査報告』1974年より)

土壇墓や木棺墓以外の壺棺墓や箱式石棺墓、石蓋土壇墓などは、弥生後期になってから多くみられる墓制であるが、千代田町の塚迫遺跡では、前期の壺棺墓が六基みつかっている。埋葬に使われた壺は、高さが四〇〜八〇センチの大きさがある。また、小型の鉢や壺を合わせた合口壺棺墓もみつかっている。後期の壺棺墓は、広島市の寺迫遺跡や長う子遺跡(図2-3-9)、豊谷遺跡、高井遺跡(佐伯区)などで発見されているが、いずれも小児用の埋葬と考えられる。

箱式石棺墓には、東広島市鍵向山石棺墓(二一基、図2-3-10)、広島市丸子山石棺墓(一五基以上)などがある。さらに後期以降になると、溝

や石積みで方形に区画された方形周溝墓や方形台状墓があらわれ、区画されたなかに、数十から数百に及ぶ土壙墓、木棺墓、石蓋土壙墓などが築かれた場合もある。こうした共同墓は、農耕社会の進展とともに、農業共同体が発達した結果、共同体の墓地として営まれたことを示しているといえる。また、こうした共同墓では、形態や規模などに大きな違いはないが、なかには、丁寧につくられたものや副葬品をもつものがあらわれてくる。松ヶ迫遺跡では、一二基の土壙墓、木棺墓のなかで、管玉くだたまと朱が副葬されたものが一基みつかっている。藤ヶ迫遺跡や鍵向山石棺墓群では、石鏃の副葬されたものが一基あり、丸子山石棺群では、イモガイ製の貝輪かむわを身につけていた人骨の発見された石棺一基がある。また、三次市矢谷やだにの方形周溝墓では、七基の土壙墓のうち、中心となる第三号主体からはガラス小玉が出土しており、土壙上面からは、供食用土器と墓標石もみつかっている。このように共同墓のなかであっても、副葬品や供献祭祀用の土器の有無が存在することは、集団墓から個人墓へ変化する過程をしめすものであり、被葬者の間に身分的な差が生じはじめたことを物語るものである。こうした埋葬の差は、共同体のなかにおいて階級差が生じはじめたことをしめしており、副葬品を所有する者こそ、共同体の指導者としての性格をもっていたのであろう。そしてこれらの指導者は、その後は他の共同体との統廃合を繰り返し、やがては、一つの地域の支配者としての権力を掌握するようになったものとおもわれる。

熊野町の弥生時代遺跡

熊野町の弥生時代遺跡には、白石遺跡、大水南地遺跡、狐城遺跡、重地遺跡、木綿地遺跡などがある。規模、内容のわかるものはないが、採集された土器や石器から推測して、いずれも弥生中期・後期の遺跡と考えられる。

白石遺跡 熊野町大字中溝字白石

石風呂川左岸の丘陵南側の緩やかな斜面に位置する。標高は約二九五メートル、低地からの高さは約五〇メー

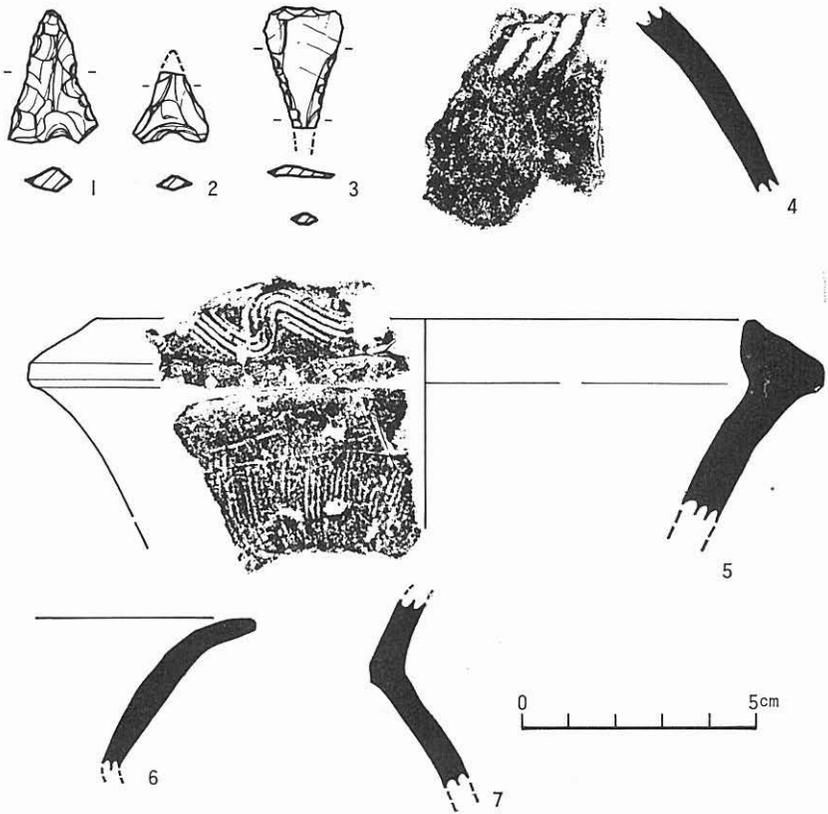


図2-3-11 白石遺跡出土の石器・弥生土器

トルである。弥生土器、石器、剥片、土師器などが採集されている。土器には、壺、甕があり、肩部に刺突文のめぐるものや肥厚した口縁端部に櫛描き沈線文や刺突のほどこされたものがある(図2-3-11)。内面はヘラ削りによって調整されている。いずれも弥生中期後半から後期前半ごろの土器とおもわれる。石器は石鏃と石錐が採集されている。石鏃は長さ二・八センチ、幅二センチ、厚さ五ミリのものと長さ二センチ、幅一・六センチ、厚さ四ミリのものがある。いずれも

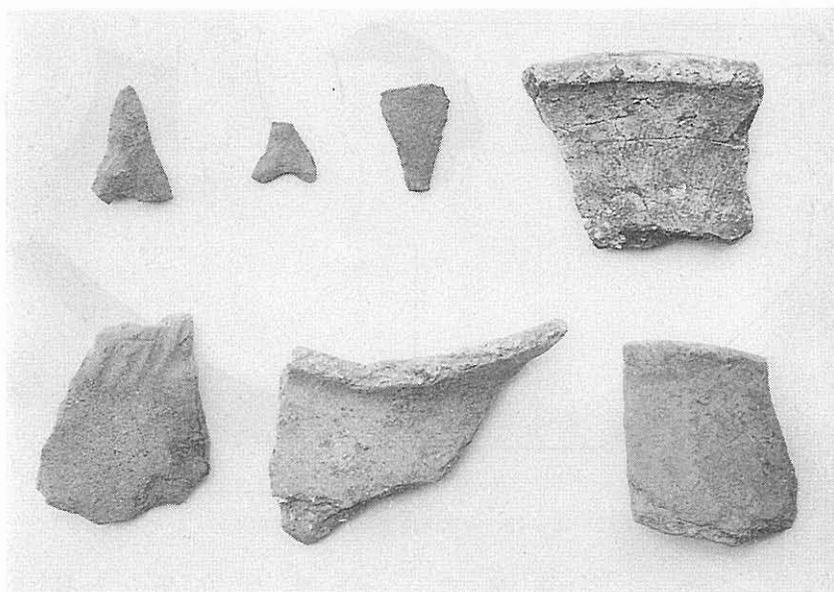


図2-3-12 白石遺跡出土の石器・弥生土器

両面加工であるが調整は粗い。安山岩製である。石錐は先端を欠失するが、長さ二・五センチで縁辺に加工がほどこされている。薄い縦長の剝片が使われており、表裏両面に大きな剝離面が残っている(図2-3-12)。

大水南地遺跡 熊野町大字出来

北から南にのびる丘陵先端部にあり、標高約二一〇メートル、熊野川からの高さ約一〇メートルである。現在付近一帯は水田となっており、水田と水田を分ける畦の法面から土器が出土している。土器には壺と高坏がある。壺は口径一五・三センチで口縁部はくの字状に外反している。口縁部は肥厚しており、わずかに凹線の痕跡が残る。頸部にはハリツケ凸帯がめぐり、その上に刻み目刺突が加えられている。内外面ともヘラ削り調整である。底部は外面にヘラ磨きの痕跡が残っている。高坏は脚部の上端のみが残っており、内外ともヘラ削りによって調整されている。茶灰色を

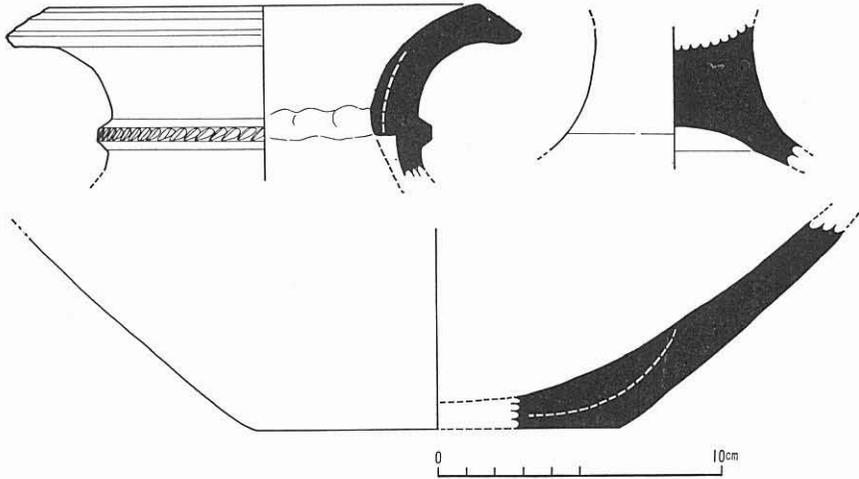


図 2-3-13 大水南地遺跡出土の弥生土器

呈し、焼成はよくない。弥生中期末から後期前半のものと推定される(図 2-3-13、14)。

このほか道上遺跡では弥生土器(図 2-3-15)が採集されており、石鏃類も町内各地でみつかっている(図 2-3-16)。九ノ通遺跡、大歳神社下、坂面大池などで採集された石鏃は形態、調整から縄文時代のものと考えられるが、長尾遺跡、地蔵の前、上明などから採集されたものは弥生時代のものともみよからう。

このように熊野町の弥生時代遺跡は、弥生中期後半以降になって形成されたものが多いようである。このことは、熊野町において稲作を基盤とする生活がはじまったのは、弥生中期以降であることを示しているといつてよい。また、出土遺物からみて人々は、盆地の縁辺のところどころで小規模な生活を営んでいたと考えることができるようである。

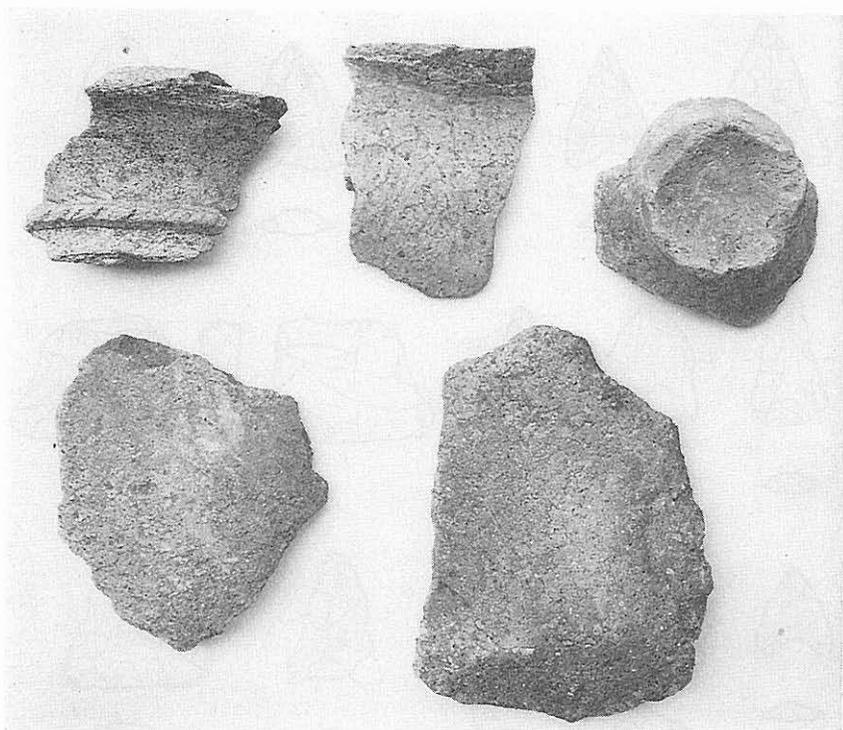


図 2-3-14 大水南地遺跡出土の弥生土器

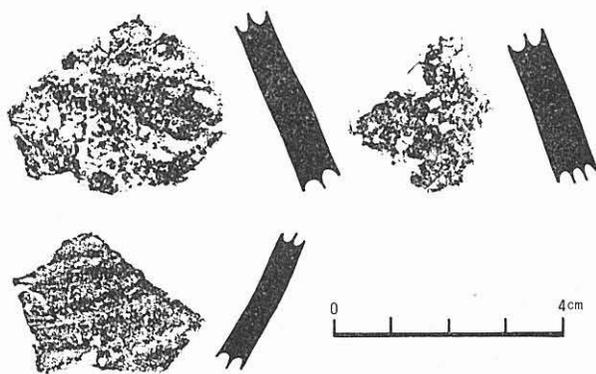


図 2-3-15 道上遺跡出土の弥生土器

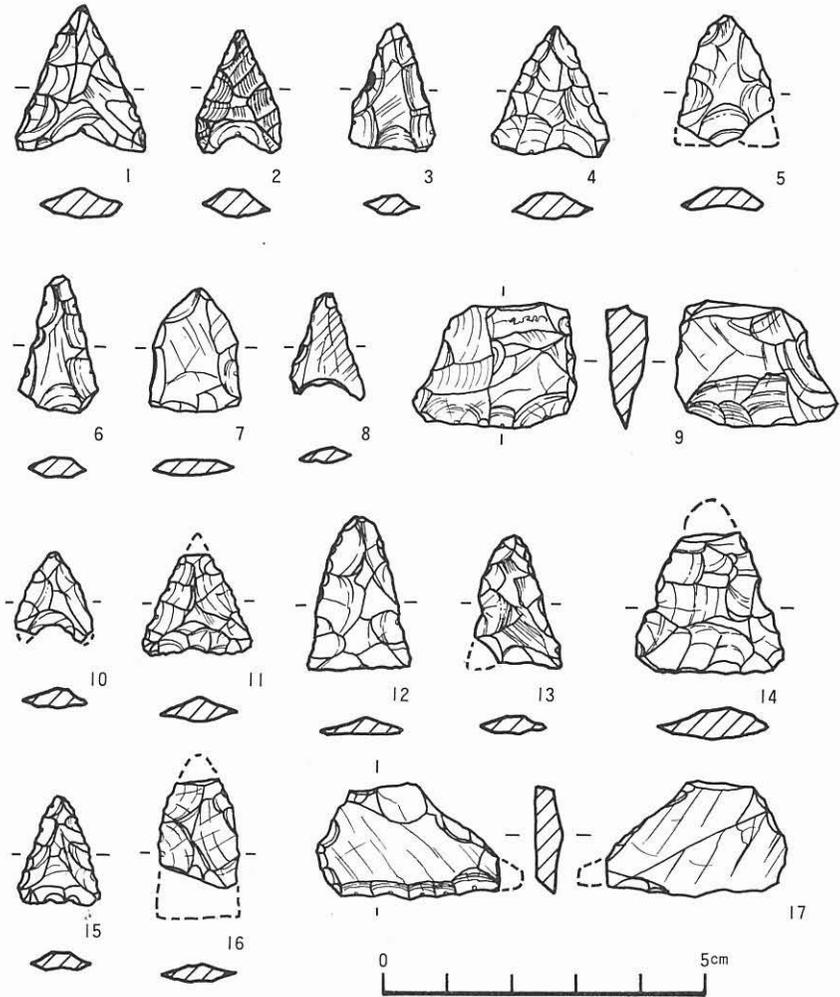


図2-3-16 町内各地出土の石器

1 平谷・九ノ通、2・3 出来・大蔵神社下、4・5 出来・亀田屋上、6・7 呉地・長尾、8・9 中溝・重地第2、10・11 中溝・坂面大池、12 出来・地蔵の前、13・14 呉地・上明、15・16 川角・上の山、17 萩原・大原